

31 耳掛け型 DAF の継続使用の効果と終了後の経過

国リハ研究所 感覚機能系障害研究部 酒井奈緒美 森浩一
病院 第二機能回復訓練部 餅田亜希子

1. はじめに

吃音者は遅延聴覚フィードバック (DAF) 条件下で発話すると吃音が減少することが知られており、古くから DAF は吃音訓練で使用されてきた。一般に吃音訓練効果の日常への般化は困難なため、近年は小型の DAF 装置が開発されてきた。それにともない、携帯型 DAF 装置の有効性に関する研究が報告されているが、それは訓練室内の発話によるものが多く (Van Borsel ら, 2003 ; Stuart ら, 2004)、日常の発話場面のデータからその有効性を示した研究は少ない。また装用終了後の効果の維持については、日常の発話場面データを元にした報告はなく、今後のデータの蓄積が必要と考えられる。本研究では日常の発話困難場面での携帯型 DAF の継続的使用効果、ならびに継続使用終了後の経過を詳細に観察した 1 症例について報告する。

2. 方法

耳掛け型 DAF 装置を用いた。6 ヶ月間毎日 15 分以上の装用と週 2 回の電話場面での発話録音を依頼した。月に 1 回面接を行い、DAF なし/あり条件下の発話を録音した。半年後には装用を終了したが、装用期間と同様週 2 回の電話場面の録音と月 1 回の面接を半年間行った。この間通常の外来で 1-2 ヶ月に 1 度のセラピーを行っているが般化訓練は施行していない。

3. 結果と考察

①面接場面：装用期間中、非装用時/装用時とも徐々に吃症状が減少した。装用終了後も、吃頻度は装用期間後半と同程度であった。

②日常の困難場面：面接場面と同様、装用期間中徐々に吃頻度の減少が認められた。装用終了後は多少吃頻度が増加したが、装用期間前半よりは少なく、部分的に装用期間中の効果の維持が認められた。

③自己評価：装用期間中の装用・訓練効果、さらに装用終了後の効果の維持も強く認められた。

④発話速度と吃頻度：装用期間中、発話速度と吃頻度が平行して減少した。装用終了後は発話速度が上昇したものの、吃頻度は比較的低いままであった。

4. 結論

面接・困難場面ともに DAF の継続使用効果が認められた。装用終了後の効果の維持も認められたが、困難場面ではその効果は弱かった。発話速度との関係から、DAF の訓練効果に速度低下以外の要素が含まれる可能性が示唆された。

5. 引用文献

[1] J. V. Borsel, G. Reunes & N. V. Bergh. Delayed auditory feedback in the treatment of stuttering: clients as consumers. *Int. J. Lang. Comm. Dis.*, 2003. 38(2). 119-129.

[2] A. Stuart, J. Kalinowski, M. P. Rastatter, T. Saltuklaroglu & V. Dayalu. Investigations of the impact of altered auditory feedback in-the-ear devices on the speech of people who stutter: initial fitting and 4-month follow up. *Int. J. Lang. Comm. Dis.*, 2004. 39(1), 93-113.